心肺蘇生法に神様は必要か？

　どうせなら辞世の句を詠む暇を与えて欲しい。

　そんな事を思わず考え、恐怖から目を瞑ってしまった俺。いよいよ危惧していた攻撃が襲ってきた……と思ったら、その攻撃は思いもかけない方向からだった。来たのは左。しかも、あんな大剣の攻撃の割には、全くと言っていいほど痛みや衝撃が少ない。

　それが相手の攻撃によるものでは無く、自分を庇って突き飛ばした妖精モドキによるものだと知ったのは、そのすぐ後だ。

　突き飛ばした妖精モドキと、突き飛ばされた俺との間に、振り下ろされた大剣が地面に突き刺さる。

　攻撃は命中しなかったものの、地面に突き刺さったその衝撃たるや凄まじいもので、俺と妖精モドキは大きく吹っ飛ばされる。

　その瞬間、何とか目を開けていた俺の目に、あるものが飛び込んできた。

　ああ、あれが『ガデスクリスタル』か。

　大剣の衝撃で、クレイオスの白髪が揺らめき、小さな水色の、まるで水晶のようなイヤリングが見えたのだ。

　それが何故『ガデスクリスタル』だと分かったのか……理由は分からないが、そう断定出来たのは、単に『ガデスクリスタル』に閉じ込められている神様の力を感じたからなのかも知れない。現に、俺はそのイヤリングから目を離せなかったのだ。

　思わず見とれてしまいかけた俺だったのだが、『ガデスクリスタル』が再び白髪の影に隠れた瞬間、慌てて頭を振って現実に戻る。今は、余計なことに気を取られている場合ではない。

「妖精モドキっ！」

　恐怖や驚愕、その他色んなものから立ち直るや否や、俺はそう叫んだ。

　だが、その心配は杞憂に終わる。吹き飛ばされた妖精モドキは、何事もなかったかのように再び銀羽を広げていた。

「瞬様、無事ですかっ？」

　宙に浮かびながら妖精モドキが叫ぶ。刹那、クレイオスが俺の方に目を光らせたのが見えて、俺は答える代わりに急いでその場を飛び退いた。

「……っ！」

「ほう、勘は悪くないようだな」

　視線で「大丈夫」と伝えたつもりだが、分かってくれただろうか……なんて一瞬だけそう考えていた合間に、どうやらクレイオスが攻撃を仕掛けてきたようだ。クレイオスのいた所から、先程まで俺がいた所まで、まるで一本の長く太い線のように地面が抉れていた。

　多分、斬撃か何かなのだろうと思うのだが……ゾッとする。

　これは、背中を向けたらやられると、本能が告げていた。だが、まともにやっても勝てないことは明白。

　つまり俺は、『クレイオスに背中を向けずに、自身の心臓を止める。あるいは逃げる』という、今の俺にはちょっと……どころじゃないくらいハードルの高いミッションをクリアしなければならないわけだ。

「……やっべ、マジでどうするよ？」

　小声で呟いてしまった俺の頬に、一筋の汗がツーっと流れ落ちる。

　文面におこせば、かなり軽い言葉なのだが、それとは裏腹に、俺の頭の中はグチャグチャになっていた。打開策が何も出てこないのだ。

　クレイオスが再び、今度は水平に斬撃を打ち出す。

　それをしゃがむ事で、何とか回避した俺だったが、

「……っ？」

　何ということであろうか。そのまま立ち上がることが出来なくなってしまった。

　ついにはしゃがむ体勢すら維持できなくなり、俺は尻餅をついてしまう。

「ほう。今のも避けたか」

　剣先をこちらに向けて歩み寄ってくるクレイオスの声は、どこか嬉しそうだ。

　ああ、俺、遊ばれてる。

　直感で、そう理解した。

　今の一撃も、もしかするとさっきの一撃も、クレイオスは恐らく、俺に当てようと思えば当てられたのでは無いだろうか。

　猫が、追い詰めた鼠を捕食する前にいたぶっている、あるいは俺という『玩具』で遊んでいる、そんなイメージしか沸かない。

　畜……生……！

　どうすることも出来ず、俺は仰向けに、大の字に転がった。

「……む？　どうした？　もう終わりか？」

　そんな俺を不審に思ったのか、クレイオスが眉を顰めるのが視界の端に映る。

　おや？

　そんな中、俺はクレイオスの背後からこっそりと忍び寄る妖精モドキの姿を捉えていた。どうやら、クレイオスが俺に気を取られている間に、イヤリングになっている『ガデスクリスタル』を取り戻そう、という魂胆らしい。

　だが、それと同時に、俺の視界にもう一つ、あるものが映っていることに気がついた。

　木だ。全長十五メートルはありそうな、巨大な木。今は春なので、まだ青々とした葉が生い茂っている。まるで、北欧神話に出てくる『世界樹』のような、そんな木だ。勿論、あれと比べるとミニチュアみたいなものではあるが。そう言えば、校舎と部活棟の間には、こんな木があった気がする。

「……気がついているぞ、宮殿の召使！」

　クレイオスはどうやら後ろから忍び寄る妖精モドキの存在に気がついていたようで、振り返るついでに両腕で大剣を振り回す。三度巻き起こる斬撃が、まわりの空気を切り裂くかのような勢いで水平に飛んでいく。

　だが、妖精モドキはまるでそれを予測していたかのように、ピッタリのタイミングで空中に逃げ、その斬撃を躱した。

　同時に、妖精モドキの「してやったり」と言わんばかりの表情を見て、俺はこいつの真の狙いを悟る。

「……おいおい」

　標的を外した斬撃が、巨大な木の根元をバッサリと切って突き進む。そして、後ろの部活棟の壁にぶち当たり、爆音と共にその壁を凹ませた。もしあれが俺に直撃したら……多分、原型はとどめていないんだろうなと、どうしようもないことを考えてしまう。

　斬撃の余波はまだ終わらない。壁に直撃し、凹ませたその時に生じた新たな衝撃を後ろから受け、今はもう土台を失ってしまった木は、俺達の方にゆっくりと倒れ込んでくる。

　クレイオスは、ちらりと俺の方を見ると、すぐさまその場を飛び退いて、妖精モドキに突っ込んでいく。もう、俺は眼中に無いようだ。

　そりゃそうだろう。倒れてくる木を斬撃で木っ端微塵にしてもいいが、放っておけば、もう動けないであろう俺に当たるのだ。どうせ後で俺を殺すのなら、ここで木に殺させたほうが、手間が省ける。俺がクレイオスでも、そうするだろう。

　だが、こいつは知らない。俺の目的が、まさか『心臓を止めること』だなんて、知っているはずが無い。からくりを知らなければ、思いつきもしないだろう。誰がどう考えても、完全に意味不明なのだから。

　ここだ。ここしかチャンスは無い……！

　絶対に痛い心臓の止め方なのは分かったが、ここでやらなきゃ死ぬのは確実だ。いや「心臓を止める」のだからどっちにしろ死ぬんだが、細かいことはいい。

　俺は、「なるべく痛くないように」と心の中で無駄に祈りながら、クレイオスに気づかれないように自分の体の向きを変えるため、右足で思いっきり地面を蹴る。

　丁度、木が俺の胸を横断するように、心臓を木の倒れてくるラインに乗せるように。

　枝が怖いが、この位置なら俺に直撃するのは木の幹……だけのはずだ。多分。

　ちらっと見ると、クレイオスの振り回す大剣を、空中で器用に躱す妖精モドキの姿が見えた。よく見えないが、額に玉のような汗を浮かべながら集中しているようだ。

　それに対し、クレイオスの表情はかなり明るい。笑みさえ浮かべているところを見るに、どうやら俺の時のように、妖精モドキをいたぶるのを楽しんでいるらしい。俺という『玩具』が壊れたから、次は妖精モドキというわけか。随分と余裕なようで、大変結構なことだ。

　倒れてくる木の幹が俺の視界を塞いだ瞬間、目を閉じる。

　後は上手くいくことを祈るだけ。俺の役割はここで終わりだ。妖精モドキを助けるのも、クレイオスをぶっ飛ばすのも、何とかするのは後に来る奴の仕事だ。

　だが痛みが俺の生命活動を殺すまでの間に、俺は心の中でクレイオスに向かって呟いた。

　クレイオスよ。この世界にはいい言葉があるんだぜ？　『窮鼠猫を噛む』っていう諺がな。

　遊ぶのは構わんが、殺せる時に俺達を殺しておかなかったことを後悔させてやる……！